

第3回 批判的言語教育国際シンポジウム

未来を創ることばの 教育をめざして

内容重視の批判的言語教育（Critical Content-
Based Instruction: CCBI）の10年

2025年8月7日（木）・8日（金）

関西大学 千里山キャンパス

未 来を創ることばの教育とは、いったいどんな言語教育なのでしょうか。私たちは、『未来を創ることばの教育をめざして：内容重視の批判的言語教育の理論と実践』（2015、ココ出版）にて、言語教育・日本語教育の目標を「言語の知識やスキルの効率的な習得」から、「コミュニティメンバーとして社会に参加しその将来を担う人間を育成する教育」へと変換する必要性を唱えました。そして、その目標を達成するための一つのアプローチとして「内容重視の批判的言語教育（Critical Content-Based Instruction: CCBI）」を提案しました。「内容重視の批判的言語教育」の根幹にある「批判的・クリティカルな視点」というのは、「今ある社会をよりよくしていくという前向きな視点」です。

本 大会は、『未来を創ることばの教育をめざして：内容重視の批判的言語教育の理論と実践』の出版から10年経った今、そのアプローチがどのように進化・発展してきているのか、どのような問題点・課題が明らかになったのか、など、みなさんとの建設的な意見交換の場にしたいと思っています。

詳細はHPをご覧ください。

https://www.cocopb.com/CCBI_2025/ccbi2025_home.html



▶ 問い合わせ

ccbiconference@gmail.com

批判的言語教育国際シンポジウム実行委員会

実行委員長：神吉宇一（武蔵野大学）

協賛：ココ出版

未来を創ることばの教育をめざして

内容重視の批判的言語教育（Critical Content-Based Instruction: CCBI）の10年

2025.8.7（木）／8（金） 関西大学千里山キャンパス

大会スケジュール

8/7				
教室	C201	C301	C302	C303
11:00	受付	開会		
12:30				
12:40				
14:30	【ワークショップ】 <u>なんのために、どのようにことばの教育を行うか</u> —言語教育言説の批判的検討に向かって	嶋津百代（関西大学） 尾辻恵美（シドニー工科大学） 神吉宇一（武蔵野大学） 熊谷由理（スミス大学） 佐藤慎司（プリンストン大学） 田嶋美砂子（茨城大学） 中島豊（ニューサウスウェールズ大学） 松田真希子（東京都立大学） 向井裕樹（ブラジリア大学） 羅曉勳（台中科技大学）		
口頭発表 司会		休憩		
15:00	【口頭発表】 <u>日本社会におけるマイクロアグレッションとマジョリティの特権意識</u> —無意識の差別の「無意識」を問う オーリ・リチャ（武蔵野大学）	【口頭発表】 <u>初級レベルからの異文化コミュニケーション活動「モノマチ」のインストラクショナルデザインに関する検討と提案</u>	【口頭発表】 <u>楽しい国際交流に「批判的振り返り」は必要か</u> —国際共修における学びの深さを問う 村田晶子（法政大学） Yuko Prefume（ペイラー大学）	【口頭発表】 <u>楽しい国際交流に「批判的振り返り」は必要か</u> —国際共修における学びの深さを問う 村田晶子（法政大学） Yuko Prefume（ペイラー大学）
15:30	【口頭発表】 <u>日本社会における言語継承の当然視</u> —トランスリンガル・ネーム・マイクロアグレッションに着目して 中家晶瑛（上智大学大学院生）	【口頭発表】 <u>「言語を使って社会課題を考える」海外日本語教育実習</u> —台湾と日本の大学間国際共修の事例研究 野々口ちとせ（甲南大学） 東弘子（愛知県立大学） 菅田陽平（東海大学） 張瑜珊（東海大学）	【口頭発表】 <u>内容理解から批判的な「読み」へ</u> —イギリスの歴史教科書を用いた言語教育の実践 渡辺紀子（立命館大学）	【口頭発表】 <u>内容理解から批判的な「読み」へ</u> —イギリスの歴史教科書を用いた言語教育の実践 渡辺紀子（立命館大学）
16:00	休憩			
16:30	【口頭発表】 <u>社会正義目標を志向したアイデンティティに向き合う単元での学び</u> 此枝恵子（ベイツ大学）	【口頭発表】 <u>外国につながる児童生徒の理科学習での「ことば」に関する一考察</u> 権野禎（お茶の水女子大学大学院生）	【口頭発表】 <u>学習者オートノミーを導く合宿型対話活動の提案</u> —台湾の日本語学習者の活動事例から 虞安寿美（銘傳大学） 永富菜穂美（国立陽明交通大学） 工藤節子（東海大学）	【口頭発表】 <u>学習者オートノミーを導く合宿型対話活動の提案</u> —台湾の日本語学習者の活動事例から 虞安寿美（銘傳大学） 永富菜穂美（国立陽明交通大学） 工藤節子（東海大学）
17:00	【口頭発表】 <u>主観的キャリア形成を支えることばの教育とは何か</u> —日本で就職した元留学生の転機の語りから 山本晋也（周南公立大学）	【口頭発表】 <u>『ゴールデンカムイ』を媒介とした台湾原住民族児童への日本語教育において浮かび上がった文化の省察</u> 張瑜珊（東海大学） 許文婕（東海大学大学院生）	【口頭発表】 <u>日本語学習ポートフォリオによる実践「表紙を（で）語る」</u> —学習者によるカスタマイズを可能とした表紙を教室活動に生かす試み 駒澤千鶴（天津科技大学） 菅田陽平（東海大学）	【口頭発表】 <u>日本語学習ポートフォリオによる実践「表紙を（で）語る」</u> —学習者によるカスタマイズを可能とした表紙を教室活動に生かす試み 駒澤千鶴（天津科技大学） 菅田陽平（東海大学）
17:30	移動			
18:00	懇親会（～ 20:00） 於：100周年記念会館（発表会場から徒歩5分程度）			

教室	C201	C301	C302	C303	C204
9:00	受付	【ワークショップ】 <u>悪夢のようなディスカッション授業から離脱しよう</u> 鈴木綾乃（横浜市立大学） 羅曉勳（台中科技大学） アドゥアヨムアヘゴ希佳子（宝塚大学） 鈴木秀明（目白大学）			【討論会】 <u>「日本語教育の参照枠」を通して語り合うラウンドテーブル</u> —哲学する教師を目指して 亀田美保（大阪YMCA日本語教育センター） 奥村三葉子（NPO法人YYJ・ゆるくてやさしい日本語のなかまたち） 竹田悦子（コミュニケーション学院） 山本弘子（カイ日本語スクール）
10:30		休憩			
口頭発表 司会		長谷川敦志（午前） 村田晶子（午後）	鈴木綾乃（午前） 野々口ちとせ（午後）	亀田美保（午前） 西口光一（午後）	
11:00		【口頭発表】 <u>日本語教育とシティズンシップ教育とを媒介する読解授業についての一考察</u> —「日本語教育の参照枠」との関連で 名嶋義直（琉球大学）	【口頭発表】 <u>トランスランゲージングCLIL</u> —言語不安や意識は変化するか 戸出朋子（広島修道大学）	【口頭発表】 <u>内容重視の批判的言語教育（CCBI）のための言語教師教育方法論</u> 佐藤剛裕（横浜デザイン学院）	
11:30		【口頭発表】 <u>日本語教育施策の批判的談話分析</u> —文化庁日本語教育小委員会議事録に現れる「待遇」に注目して 今井新悟（合同会社Logos） 申貞恩（筑波大学）	【口頭発表】 <u>「ことばを教える授業」再考</u> —母語話者、非母語話者が共に学ぶ授業を目指して 工藤節子（東海大学）	【口頭発表】 <u>学際的アプローチによるCCBI中級日本語カリキュラムデザインの試み</u> —多元的観点からの批判的思考力を育てるために ロチャー・松井恭子（コロンビア大学） ソーリアル・長坂直子（コロンビア大学）	
12:00	ランチタイム				<u>ポスター発表</u>
13:30		【口頭発表】 <u>留学プログラムにおけるカリキュラム改革の実践</u> —言語学習を超えて社会参加を促進する 西俣美由紀（京都アメリカ大学 コンソーシアム）	【口頭発表】 <u>型にはまらず、引き伸ばそう</u> 新井潤（関西学院大学）	【口頭発表】 <u>現代文化資源学と日本語教育の統合を目指すFLACの試み</u> —アニメ・マンガを教材に 栗山恵子（熊本大学） 秋山泰子（インディアナ大学ブルーミントン）	
14:00		【口頭発表】 <u>CCBIの理念を共有する教育実践を3つの教学場面から振り返る</u> —海外の大学日本語学科の専門教育、日本の日本学科専門教育、日本の共通教育から考える 松永稔也（天理大学）	【口頭発表】 <u>インターンシップを通して育む「批判的社会人」への道</u> 長谷川敦志（ハワイ大学マノア校）	【口頭発表】 <u>中級日本語授業におけるungradingの試み</u> —多読授業の内省から 嶺縺憲子（米国ノートルダム大学）	
14:30	休憩				
15:00		【パネルセッション】 <u>学術的コロニアリズムに迎合／抵抗する言語教育研究</u> 寺沢拓敬（関西学院大学） 梶ヶ谷穀（国際基督教大学・ブリティッシュ コロンビア大学） かどやひでのり（津山工業高等専門学校） 神吉宇一（武蔵野大学） 山下里香（関東学院大学） 巨理陽一（中京大学）			【ポスター発表&ディスカッション】 <u>インクルージョンを推し進めると言語教育の本質が見える!</u> 植村麻紀子（神田外語大学） 池谷尚美（横浜市立大学） 中川正臣（城西国際大学） 古屋憲章（帝京大学） 山崎直樹（関西大学）
17:00		閉会			

8/8 ポスター発表

日本語教科書にみられる会話例の批判的考察 近藤さくら（関西大学大学院生）、飯利藍（関西大学大学院生）
語られる自己はいかにして生まれるか—大学教員の人生の経路に着目して 尹惠彦（大阪経済法科大学）、西村英希（近畿大学）
日本語学習者の授業時の内言の調査—質問紙の試作と実施結果の分析 加藤伸彦（京都外国語大学）
国際共修授業における「人生の木」を通したナラティブの実践—内容重視の日本語教育への応用に向けて 近藤弘（北海道大学）
「日本語」関連政策談話の批判的談話研究—政権与党と野党第一党の政策文書を比較して 加藤林太郎（神田外語大学）、山元一晃（金城学院大学）
まちのことばを考えつくる実践をともにふりかえる—未来をつくることばの活動の展望 佐野香織（武蔵野大学）
自分が生きる未来やコミュニティを創造するために—日本語学校における実践と課題 寺浦久仁香（武蔵野美術大学）
日本語教師にとって「成長」とは何を意味するのか—「自己語り」と「語り合い」からの考察 山本もと子（信州大学）、嶋津百代（関西大学）
日本語教科書の定義・特徴・分析の観点からの文献検討—教材研究から教材分析、そして批判的教科書研究へ 吉井雄樹（関西学院大学大学院生）
「日本語教育の参照枠」に基づく「生活Can do」を用いた「生活」に関する日本語教育プログラムの開発実践とその課題—トップダウンとボトムアップの協同を実現するには
内山夕輝（公益財団法人浜松国際交流協会）、鈴木由美恵（公益財団法人浜松国際交流協会）、河口美緒（公益財団法人浜松国際交流協会）
脱植民地化のための言語教育—ブラジルにおける日本語教師育成の現場から考える Bueno da Silva Junior Antonio Marcos（早稲田大学大学院生）

2025 年 8 月 7 日 (木)

C301

12:40–14:30

C301

【ワークショップ】

なんのために、どのようにことばの教育を行うか

—言語教育言説の批判的検討に向かって

嶋津百代（関西大学）、尾辻恵美（シドニー工科大学）、神吉宇一（武蔵野大学）、熊谷由理（スミス大学）
佐藤慎司（プリンストン大学）、田嶋美砂子（茨城大学）、中島豊（ニューサウスウェールズ大学）
松田真希子（東京都立大学）、向井裕樹（ブラジリア大学）、羅曉勤（台中科技大学）

本ワークショップでは、参加者が「私がやっていることばの教育」と「私がやりたいことばの教育」を言語化する活動を通して、「私のことばの教育」として大切にしているものや重視していることを整理していく。そして、自分自身の「言語教育観」を形づくっている「ことば」を見つめる。私たちがどのような言語教育観のもとに言語教育実践を行っているか、または行おうとしているかを可視化し意識化することが、本ワークショップの目的である。その上で、私たちは『なんのために』ことばの教育を行うのか、「それはどのように実現可能か」を議論していくことが、「私のことばの教育」を批判的に検討・再考し、更新し続けていくことにつながると考える。

15:00–15:30

C301

【口頭発表】

日本社会におけるマイクロアグレッションとマジョリティの特権意識

——無意識の差別の「無意識」を問う

オーリ・リチャ（武蔵野大学）

本研究では、日本社会において多様なルーツを持つ人々が直面するマイクロアグレッション（無意識の差別）と、その「無意識」とされる実態について批判的に考察する。マイクロアグレッションとは、特定の集団に対する無意識の偏見やステレオタイプに基づく言動であり、当事者に深刻な心理的・社会的影響を及ぼす。しかし、多くの差別的発言や行動は実際には「無意識」ではなく、日本人としての特権意識に基づき「問題のない発言」として正当化される場合が多い。本研究では、日常に潜むマイクロアグレッションの事例を取り上げ、その発生メカニズムと特権意識との関連性を、ミランダ・フリッカー（2009）が提唱する認識的不正義（epistemic injustice）の観点から明らかにする。

例えば、「ドイツと日本のミックス？ 日本語うまいね！」という発言は、日本語話者としての能力を疑問視するものであり、フリッカーの概念における証言的不正義の一例といえる。ここでは、話し手の証言が疑問視され、自己表現の正当性が低く評価されている。また、日本社会では、外国にルーツを持つ人々が「日本人ではない」とみなされることが多く、これは解釈的不正義にも該当する。彼らの経験やアイデンティティは、日本社会の支配的な言説の中で適切に理解される枠組みを持たず、差別的な経験を指摘しても「気にしすぎ」「悪気はない」と退けられることが多い。

このようなマイクロアグレッションは、日本人の特権意識と密接に結びついている。特権を持つ側の人々は、自らの発言が差別的であることに気づかず、それを「普通のこと」として扱うことで、差別の構造を維持する。また、無意識の差別が「悪意のない言葉」として容認されることで、当事者は自らの経験を正当に語る機会を奪われ、社会的な不平等が再生産されている。

この問題に対処するためには、マイクログレッションの認識を高めるだけでなく、特権意識を可視化し、それに向き合う教育が求められる。特に、学生の自己省察（reflexivity）を促す教育が重要であり、自らの発言や態度がどのように権力関係や社会構造と結びついているかを考えさせることが必要である。

本研究の成果は、言語教育や異文化コミュニケーション教育、そして社会的公正の観点から重要な意義を持つと考え、本国際シンポジウムで発表することを決めた。

Fricker, M. (2009) *Epistemic Injustice: Power and the Ethics of Knowing*. Oxford University Press

キーワード：マイクロアグレッション、特権意識、認識的不正義

15:30–16:00

C301

【口頭発表】

日本社会における言語継承の当然視

——トランスリンガル・ネーム・マイクロアグレッションに着目して

中家晶瑛（上智大学大学院生）

外国にルーツのある子どもは、親の母国に生まれ学齢期に来日した子どもだけではない。近年では、就労や留学など様々な理由で来日した人々を親に持つ日本生まれの子どもも数多く存在する。

彼らは全員、家庭で話されている親の母語、つまり継承語を自然に習得し、日本語とのバイリンガルになるわけでは決してない。彼らの中には、親が高度な日本語力を有することから、学校でも家庭内でも日本語を使うことから、継承語能力が低い子どももいる。しかし、均質的な言語文化観のある日本社会では、外国にルーツのある人々が継承語を話せることが当然視され、「○○人だったら△△語を話してみて」等、周囲から期待や好奇心が向けられる。そこから当事者は「継承語が話せない」という事実を再認識させられ、大きな心理的影響を受ける（Nakamura, 2020 など）。

Dovchin (2022) は、移民の名前はマジョリティ側の名づけの規範や伝統に沿わないことから、ホスト社会のマジョリティが、誤読や誤解、性別の間違い、嘲笑するなどの行為に対して、それを人種的な侮辱であるとし、それをトランスリンガル・ネーム・マイクロアグレッションと提唱した。本研究では、この概念を言語継承のトピックへの援用を試み、研究課題を以下の通りに設定した。①調査対象者であるルカさんの経験から見られたトランスリンガル・ネーム・マイクロアグレッションはどのようなものか。②日本社会における教育的示唆はどのようなものか。本研究の調査対象者は、中国出身の両親の下日本で生まれ育ち、継承語能力が低いと自認する、外国にルーツのある元子どもであるルカさん（仮名、20代後半）である。ライフストーリーから、名前から外国ルーツを有すると他者から判断された部分の一連の語りをトランスリンガル・ネーム・マイクロアグレッションの概念を用いてテーマ分析（土屋, 2016）で分析し、4つのテーマとサブカテゴリーを得た。結果と考察、意義については当日の発表で論じる。

キーワード：言語継承、マイクロアグレッション、継承語、日本生まれ、外国ルーツの人々

16:30–17:00

C301

【口頭発表】

社会正義目標を志向したアイデンティティーに向き合う単元での学び

此枝恵子（ベイツ大学）

どのようなことばの教育を通して、日本語を学ぶ学生は自らの多様なアイデンティティをより十分に表現できるようになるのだろうか。授業者でもある発表者は、アメリカの大学での多様化する学生を前にして、従来の日本語教材における日本の単一的な表象に違和感を感じてきた。特に上級を目指す段階でも自らの民族やジェンダーに関するアイデンティティを日本語で表現することに苦労している学

生を見て、教材に欠けた単語を紹介するだけでは限界があり、単元レベルでアイデンティティーと多様性に向き合うことが有益だと考えた。この発表では、アメリカの大学での中級レベルの日本語コースでの実践的研究を通して、社会正義を志向して再設計した批判的内容重視のアイデンティティーをテーマにした単元を、アメリカの大学での中級レベルの日本語学習者がどのように受け止めたのかを検証する。この単元は、従来の自己紹介の単元を元にし、社会正義スタンダード、ACTFLの外国語教育スタンダード、バックワード・デザイン（Backward Design）を参照して作り替えたもので、教科書の読み物は残したが、模倣するモデルとしてではなく、数ある学習素材の中の1つとして利用した。また、社会正義の学習目標を達成するため、SNSの投稿、コミック、ビデオなど、学習者向けのものではないマルチモダルなテキストを組み入れた。日本社会の多様な構成員が自分のアイデンティティーや経験を語っているそれらの資料を通して、学生たちは日本の多様性を学びながら、日本語での自己表現も模索した。この発表では、教員の振り返りジャーナル、単元終了後の学生のアンケート、学生のインタビューの分析から得られた主な結果を共有し、学生がこの単元をどう捉えたか、どのような読み物や活動が心に残ったか、またこの実践の課題を明らかにする。

キーワード：アイデンティティー、社会正義、多様性、カリキュラム、中級

17:00–17:30 C301

【口頭発表】
主観的キャリア形成を支えることばの教育とは何か
——日本で就職した元留学生の転機の語りから

山本晋也（周南公立大学）

本研究は、大学卒業後に日本で就職した外国人留学生（≒元留学生）の経験する「転機」と、転機に生じる困難を乗り越えていくプロセスについて明らかにするものである。転機とは人生の中で人が大きく変化する時であり、小さきさまざまな転機の積み重ねにおいて人のキャリア発達が促されるという（柏木2016）。近年、日本語教育分野でも留学生のキャリア形成に関する研究が増加しているが、大学を卒業した元留学生のキャリアに着目した研究は数少ない。そこで本研究では、日本社会で元留学生が遭遇する転機をナラティブとして捉え、転機の経験が個人的にどのような意味を持っていたのか、そして、主観的キャリアの形成にどのような影響を及ぼしたのかを調査した。

調査協力者は、日本での就職後3年以上が経過した元留学生2名である。日本で働き始めた時点から現在に至るまでの印象的な出来事や自身の変化に関する半構造化インタビューを実施し、その録音データおよび文字化資料を分析の対象とした。分析には「複線径路等至性モデリング（Trajectory Equifinality Modeling：TEM）」（安田・サトウ2017）の手法を採用し、どのような経験がキャリアの転機となったのか、その背景にどのような社会的・文化的要因があったのかを調査した。その結果、新たな生活環境や職場/仕事への適応過程において、自身が「留学生」として築いてきた能力や関係性、およびその構築に関わる経験が支えとなっていることが分かった。また、一方でそうした過去の経験と意味づけが、現在の状況との比較において様々な葛藤を生み出しており、キャリアの分岐点となって現在につながっていることが示唆された。当日の発表では、上記のプロセスをより詳細に示すと共に、他者との相互行為や関係構築の経験を通じて形成される主観的なキャリアに、日本語教育がどのようにアプローチできるのかを検討したい。

キーワード：元留学生、主観的キャリア、就職、転機、TEM

C302

15:00–15:30 C302

【口頭発表】
**初級レベルからの異文化コミュニケーション活動「モノマチ」の
インストラクショナルデザインに関する検討と提案**

宮岡余里子（KOTO KATO A）

本研究は、来日直後の中国人初級日本語学習者を対象に、地域の職人と協働する異文化コミュニケーション活動「モノマチ」を年1回、2年間にわたって継続実施し、インストラクショナルデザイン（ID）の視点からその教育的効果を検討した実践研究である。研究の背景には、初級日本語学習者の言語運用機会の少なさや、異文化理解教育の導入時期に関する課題がある。また日本の生活において学習者は、生活適応の不安を抱えることが多い。この活動を通じて、学習者は自己の日本語運用力の限界を認識し、学習姿勢や意識に変化がみられた。活動設計においては、ADDIEモデル（分析・設計・開発・実施・評価）およびARCSモデル（注意・関連性・自信・満足）との対応を明らかにし、内発的動機づけや自己調整的学習態度の形成を促す要因を分析した。提出物・インタビュー・作文による質的データの分析からは、学習者が活動での「気づき」を契機とし、自律性や社会性を育みたいと思う自分に直面することが確認された。そして活動継続を通じ、学習者には言語運用力や他者との関係構築力が培われていたことがわかった。日本語の初級レベルからの異文化コミュニケーション活動の取り組みをここに提案し、その可能性について共に考えてみたい。

キーワード：初級日本語学習者、異文化コミュニケーション活動「モノマチ」、インストラクショナルデザイン、内発的動機づけ、自己調整学習

15:30–16:00 C302

【口頭発表】
「言語を使って社会課題を考える」 海外日本語教育実習
——台湾と日本の大学間国際共修の事例研究

野々口ちとせ（甲南大学）、東弘子（愛知県立大学）、菅田陽平（東海大学）、張瑜珊（東海大学）

本発表は、日本語と社会課題に関する統合的学習を目指した日本語教育実習の事例と、内容重視の批判的言語教育を担う教員養成の検討を目的とする。

フィールドは、海外日本語教育実習として2024年に台湾の大学で実施した短期集中日本語プログラムである。このプログラムでは日本語のレベル別に3クラスを編成したが、本発表は、10代から60代にわたる台湾人学習者約20名の初級前半クラスで、日本の大学生5名と台湾の日本語専攻の大学生3名の実習生による「観光とオーバーツーリズム」をテーマとした日本語授業の実践を対象とし、実習報告書で実習生が綴った振り返りをもとに実習生の学びを探る。

情報はインターネットなどで容易に収集でき、台湾の人々は日本のことをよく知っているため、授業では実習生自身の関心や考えを提示し学習者と交流できる内容を扱うほうがよいという指導者の助言を踏まえ、実習生たちは、自分の出身地にある観光地や自身が訪れた観光地と、そこでのオーバーツーリズムについて、学習者とともに現状認識を深め課題や解決策を考える活動をデザインし実践した。

報告書の振り返りには、実習生の多くが「楽しい授業づくり」を志向する中、初級のテーマにオーバーツーリズムを提案した実習生を含め、全員が困難と葛藤を感じながら、実習生間の話し合いで活動のアイデアを出し合い、自分に必要な支援の求め方と協働を学んだことが記されていた。また、授業で学習者から「新たな知識を逆に教えてもらおう」経験をし、言語教育観が学び合いへ変化したとの記述もあ

り、世代や言語文化の異なりなどの多様性が学びの源になったことも窺えた。

批判的言語教育の実践には、まず教師自身に社会への関心と批判的思考が求められる。教育実習の指導者にも、実習生が「難しい」と避けがちな社会課題に率先して向き合い、問題の本質を追求し思考する態度と、対話を通じて考える場づくりの力量形成が望まれる。

キーワード：社会への関心、多様性を活かした学び合い、実習生の思考の促進、指導者の力量形成

16:30–17:00 C302

【口頭発表】

外国につながる児童生徒の理科学習での「ことば」に関する一考察

権野 禎（お茶の水女子大学大学院生）

本発表では外国につながる児童生徒への教員の教科指導における「ことばの教育」について探ることを目的とする。

日本の学校に通う、外国につながる児童生徒の中には教科学習面で「ことば」の力を発揮することが難しい子どもがいる。それは教科学習の言語活動では、日常生活であまり用いられない「ことば」の使用や日常生活とは意味が異なる「ことば」の使用があるからだとされる。そのため、外国につながる児童生徒を対象とした「ことば」の力の強化および日本語支援として入り込み・取り出し授業が行われている。しかし、多くの場合、国語科あるいは算数・数学科で入り込み・取り出し授業が行われており、理科については比較的日本語支援の蓄積が少ない。そこで、本研究では、英語を教授言語とした初等中等教育の理科の教科書の「ことば」と英語が家庭言語ではない児童生徒（ESL／EL）への理科の授業（CLIL／CBIを含む）での言語活動に焦点をあて、ハリデーが提唱した選択体系機能言語学（SFL）で分析した文献を収集した。ハリデーによれば学校での教授言語と家庭言語が異なる子どもは学校で「ことばの学習」と同時に「ことばによる学習」をしているとされる。本研究では、収集した文献を次の2つの観点（「教科書にはどのような特徴をもつことばが使われているか」「教科学習での言語活動にどのようなことばの特徴があるか」）で分析した。その結果、教科書は学術的および抽象的な表現を絵図と関連づけることで理解を促進しようとしていること、言語活動では教員の指導にしたがって説明文が構成されていることが明らかになった。

キーワード：外国につながる児童生徒、理科、言語活動、選択体系機能言語学

17:00–17:30 C302

【口頭発表】

『ゴールデンカムイ』を媒介とした台湾原住民族児童への日本語教育において浮かび上がった文化の省察

張瑜珊（東海大学）、許文婕（東海大学大学院生）

本発表は、台湾の偏郷地域に住む原住民族児童を対象に、日本の漫画・アニメ『ゴールデンカムイ』を媒介とした日本語教育実践を通じて、教育者としての文化的理解の限界と責任に関する文化の省察を試みたものである。本実践は、同作品に描かれるアイヌ文化を導入教材とし、日本語の初歩的語彙を学ぶと同時に、異文化への理解と関心を育むことを目的として行われた。

しかし、教材を設計・運用する過程で、教育者自身が台湾原住民族の文化に関する知識を十分に持ち合わせていないことに気づかされた。特に、アイヌの自然観や信仰を説明する際、無意識のうちに台湾原住民族文化と類似的に接続しようとした結果、文化を「他者化」し、固定的なイメージを再生産してしまう危険性を孕んでいた。この気づきは、異文化を教材化する際の教育的態度と語りの構造に対する省察を促すこととなった。

授業では、「狩猟」「信仰」「衣装」「祭典」といった文化要素を題材とし、児童が自らの文化経験を語

る機会を設けた。児童の一部からは自民族文化への誇りが表明されたが、多くの児童は祖父母世代の文化に接した経験がなく、伝統的な儀礼や生活習慣への実感を持たないことが明らかとなった。また、彼らの語る「地域の文化的活動」の多くは、近年の地域振興施策によって創出されたものであり、伝統文化との連続性は希薄であった。こうした声は、文化の継承における断絶の現実を浮かび上がらせると同時に、外部者である教育実践者が「文化を教える」ことの意味を根本から問い直す契機となった。

本発表は、単なる実践報告にとどまらず、『ゴールデンカムイ』という異文化的素材を媒介とした言語教育を通して、教育者自身の文化理解の限界と、文化教材に内在する語りの構造および教育的責任を照射する省察的試みである。

キーワード：多文化教育、ステレオタイプ、文化継承、教育実践、教育者のメタ認知

C303

15:00–15:30 C303

【口頭発表】

楽しい国際交流に「批判的振り返り」は必要か

——国際共修における学びの深さを問う

村田 晶子（法政大学）、Yuko Prefume（ペイラー大学）

日本で学ぶ留学生の数は年々増加しており、多様な言語文化的背景をもつ学生同士の学び合いや相互理解を促進するため、さまざまな形での共修活動が展開されている（例：国際共修科目、日本語科目へのビジットセッションの導入、課外の交流イベント等）。しかしながら、こうした学生間の共修や交流が、しばしば表面的な軽い話題に終始し、深いディスカッションに至らないという指摘もある（Kramsch 2014; Helm 2015; O'Dowd & Lewis 2016; 村田 2022）。そのため、より深い学び合いを実現するための教育的デザインに関する研究が求められている。とりわけ、学びの深化に不可欠な「振り返り」の質、なかでも批判的な視点に基づく省察のあり方は、本大会のテーマである「批判的な視点の育成」（佐藤・高見・神吉・熊谷2018）とも深く関わっていると考えられる。

これまでの国際共修に関する研究は、主にプログラムレベルでの実践報告に焦点を当てており、各教育機関の関係者が自らのプログラム設計や実施概要、学生からのフィードバック、事前・事後アンケートの結果等を通じて、その教育的意義を明らかにしてきた。一方で、学生の省察に見られる深さのグラデーション、とりわけ「批判的に振り返る」という行為に対する学生の意識の差異については、十分な検討がなされていないのが現状である。

本発表では、日米の国際共修プログラムにおける参加者の振り返りの深さおよび批判的姿勢に焦点を当て、多様な実例をもとにその実態を分析する。具体的には、日米の学生による振り返り記述を分析し、そこに見られるギャップ（問題の捉え方の違い）を考察することを通じて、「批判的な振り返り」とは何か、その意義と可能性について検討を行いたい。

キーワード：国際交流、批判的振り返り、日米、大学生

【口頭発表】

内容理解から批判的な「読み」へ

——イギリスの歴史教科書を用いた言語教育の実践

渡辺紀子（立命館大学）

近年、特定の目的のための英語（ESP: English for Specific Purposes）とアカデミック英語（EAP: English for Academic Purposes）に加えて、内容の学習と言語学習を統合させたアプローチが日本の大学でも取り入れられ、CLIL（Content and Language Integrated Learning）を冠した学会や教材も見られるようになった。これにより、従来の1～2年次対象の一般英語（EGP: English for General Purposes）と3～4年次対象の専門書購読に代わるカリキュラムを導入する大学や学部も現れている。だが、国内の大学生向けには、執筆者の専門に基づき多種多様なテーマの教材が作成されているものの、概して対象レベルの設定が幅広く、語彙の習得や内容理解に重点が置かれ、読む量も少ない。一方、英語圏の出版社作成の英語教材は、対象レベル別に作成されており読む量も多めで、内容理解を超えた応用問題を含むものもあるが、一般的なアカデミック英語教材がほとんどで分野に特化した内容重視の英語教材は限られる。したがって、学生の専攻に合わせた内容に特化し、批判的な思考力を養うには、教材を自作するか既存の教材を用いた創意工夫をすることが必要となる。本発表では、イギリスの中等教育レベルの歴史教科書を用いた内容理解から批判的な「読み」へと誘う内容重視の批判的な言語教育の実践について報告する。主に、①初年次の中級レベルの学習者を対象とするリーディングに重点を置いた授業（週2回）で自らのイギリス留学経験と研究を踏まえて、なぜ、どのようにして学習者を批判的な「読み」へと誘っているのか、②学習者の批判的思考はどのように表現され、どのような反応が見られるのかに焦点を当てる。それにより、イギリスの歴史教科書を英語教育で用いることの可能性と課題を示し、日本語教育の分野を中心に発展してきた（と思われる）内容重視の批判的言語教育（CCBI: Critical Content-Based Instruction）との接続も図りたい。

キーワード：歴史教科書、英語教育、リーディング、読み、批判的思考力

【口頭発表】

学習者オートノミーを導く合宿型対話活動の提案

——台湾の日本語学習者の活動事例から

虞安寿美（銘傳大學）、永富菜穂美（國立陽明交通大學）、工藤節子（東海大學）

学習者オートノミーを導くための教育活動では、自己評価から目標を考えてもらうが、内省が十分でないことが多く、形式的な自己評価になってしまいがちである。そこで、新たにBEG（Basic Encounter Group）を援用した学習者オートノミーを導く教育活動を提案したい。

BEGはカール・ロジャースが提唱した自己理解、他者理解のための集中的グループ体験である。非構成的なエンカウンターと呼ばれ、テーマやゴールを決めずコミュニケーションが始まり、さまざまな個人的な感情体験を表現しながら、参加者同士が交流をするものである。筆者らは、単なる知的な語学の学習に比べて実感をともなう自律的な日本語の学習に役に立つと考えて、台湾でBEG（参加者：日本語学習者6人（社会人5、大学生1）＋教師3人＋ファシリテータ1人で、3泊4日（2025年1月13日～16日））を試みた。

筆者らは活動後に以下のような振り返りを行った。参加者はBEG本来の目的である自己理解、他者理解にまで行きつくことは難しいものの、自分が知っているテーマ（食べ物、旅行など）や、自分の興味と経験がある話題には活発になり会話に参加していた。しかし十分にコミュニケーションに加われない参加者もいたにもかかわらず、彼らは今後の学習に対する展望に話が及ばなかった。これから、筆者らはBEGを援用し、今後の学習につながる教育活動が必要だと考えた。

具体的な活動としては、外国語学習の方法を考えるという大枠を決め、3泊4日の合宿形式で信頼関

係を構築しながら、さまざまな話題で対話を進めていく。そしてコミュニケーションと内省を重視する活動の中で、学習の体験と自己評価から学習について考える。そして、合宿中にCEFRの自己評価を参考に、相互評価を行い、自分に必要な学習内容や学習方法をお互いに考え合って決めて試行する。その振り返りを通して、今後の目標と学習方法を定める。これにより、より現実的な学習者オートノミーの実現につなげる。

キーワード：BEG、学習者オートノミー、内省、コミュニケーション、相互評価

【口頭発表】

日本語学習ポートフォリオによる実践「表紙を（で）語る」

——学習者によるカスタマイズを可能とした表紙を教室活動に生かす試み

駒澤千鶴（天津科技大学）、菅田陽平（東海大學）

本研究は、天津市内の大学で日本語を専攻する大学生の「日本語作文」授業において、日本語学習ポートフォリオを授業実践に取り入れる際の課題について、特にポートフォリオの表紙を学習者にカスタマイズしてもらう活動に焦点を当てる。

発表者は、2009年から作文授業を担当する中で、学習者が現状を分析し、目標を立て、振り返る仕組みの必要性を実感してきた。だが、ポートフォリオの導入は、中国における日本語の作文授業では一般的とは言い難く、期末試験後に廃棄されるポートフォリオを見る度に、どうすれば学習者が成果物に愛着を持ち、学習に活用してもらえるかが課題であった。

そこで、アート思考の教育への活用方法を参考に、表紙に空白部分を設け、自己表現を促すことを目的とし、絵やシールを貼る、好きな言葉や目標を書くなどしてもらった。その後、Show & Tell型の発表や作文の執筆をしてもらい、クラス全体でも共有した。

実践後、「この活動から気づきや学びがあったのか。もしあったなら、どういったものか」という研究設問を設定し、発表者の現在の勤務先において、2022年9月～12月に作文授業を履修した学習者（日本語能力試験N4～N2レベル）を対象とし、2025年3月に一部自由記述式の振り返りを書いてもらった（回答者25名）。その結果、「好きなものについて試行錯誤しながら表現でき、書く意欲が高まった」、「視覚的な表現方法を共に考えられた」といった感想が寄せられた。さらに、ポートフォリオに対する学習者の意識については、「自分で大切に作ったものなので、丁寧に扱いたい」、「達成感が持て、大事に思うようになった」といった記述がみられた。これらの感想には、表紙を自らカスタマイズした経験や他の学習者の作品・発表に触れる機会が影響を与えたと考えられる。

発表当日は、批判的言語教育の観点から、実際の表紙例を紹介しながら、こうした教室活動の可能性と限界について報告する。

キーワード：日本語学習ポートフォリオ、表紙のカスタマイズ、作文授業、自己表現活動、アート思考

2025 年 8 月 8 日（金）			
		C301	
9:00–10:30		C301	
【ワークショップ】 悪夢のようなディスカッション授業から離脱しよう		鈴木綾乃（横浜市立大学）、 羅曉勤（台中科技大学） アドゥアヨムアヘゴ希佳子（宝塚大学）、 鈴木秀明（目白大学）	
本企画では、教育現場における「ディスカッション授業」に焦点を当て、クリティカルな視点を身につけることのできるディスカッション授業はどのようにデザインされうるかを参加者と考えることを目的とする。 発表者らは言語教育におけるよりよいディスカッション授業を目指し、経営学教育において歴史のあるケースメソッド教授法を参照した研究・実践を重ねている。ディスカッションは、自己の意見を述べ他者の意見を真摯に聞く中で、参加者間で落としどころを探ったり、自身の価値観を見直したりする経験になり得るため、ディスカッション授業を通して、問題を多角的に、クリティカルに捉える視点や、社会に内在する問題を分析し、自分なりに関わっていかうとする態度を育てることができると考えられる。しかし現実の授業実践においては、理想的なディスカッション授業が常に行えるわけではなく、発言者が偏る、陰悪なムードになる、おしゃべりとの差がないなど、悪夢のようなディスカッション授業になってしまうこともある。そこで本企画では、参加者が考える「悪夢のようなディスカッション授業」を具体的にイメージし、その原因と対策を考えることを通して、クリティカルな視点を身につけるためのディスカッション授業に何が必要か、考えることを目的とする。			
11:00–11:30		C301	
【口頭発表】 日本語教育とシティズンシップ 教育とを媒介する読解授業についての一考察 ——「日本語教育の参照枠」との関連で		名嶋義直（琉球大学）	
＊＊（2024）は「日本語教育の参照枠 報告」を批判的談話研究の姿勢で分析し、同報告が提示する日本語教育の方向をシティズンシップ 教育として捉えることが可能であると論じている。当該報告が複言語主義やCEFRを日本語教育の文脈で捉え直したものであることを考えれば、日本語教育がシティズンシップ 教育として捉え直せることは理解できる。その上で考えなければならないことは、個々の授業においてどのような教育活動を展開すれば、受講生一人ひとりのどのような市民性を育てていくことができるのかということである。そこで発表者は2024年度後期に所属大学において、短期交換留学生の上級レベル留学生向けに、シティズンシップ 教育を目指した教材を用いて、社会的内容を素材とする読解授業を行った。授業は採用した教材に沿って3段階で行った。第1段階は教材が背景とする複言語主義やシティズンシップ 教育の理念について学習する段階である。次は新聞の見出しという短いテキストを用いて5つの観点から批判的に読む練習をする段階である。そして最後は受講生一人ひとりが教材のコンテンツの中から自分の興味関心に即して読みたい課を選び、受講生全員がその課を読んで話し合う段階である。この3段階の活動はそれぞれ「日本語教育の参照枠 報告」における「言語教育観の三つの柱」（p.6、p.10）と結びつく。理念を読み理解する第1段階は、受講生が「自分自身を『社会的行為者（または社会的存在）』として捉え直す段階」であり、多面的・複合的な読みの批判的リテラシーを		高める第2段階は「言葉を使って『できること』を増やす段階である。第3段階の「対話」は受講生個人が発する多様な思考に触れる場であり「多様な日本語使用を尊重する」時間である。以上から、社会的内容を重視した批判的姿勢の読解授業は日本語教育とシティズンシップ 教育とを媒介することが可能である。 キーワード：日本語教育、シティズンシップ 教育、批判的リテラシー、読解、日本語教育の参照枠	
11:30–12:00		C301	
【口頭発表】 日本語教育施策の批判的談話分析 ——文化庁日本語教育小委員会議事録に現れる「待遇」に注目して		今井新悟（合同会社Logos）、 申貞恩（筑波大学）	
2024年日本語教員の国家資格になった。これにより教員の質向上、社会的地位向上、及び待遇改善が期待されている。そのための試験が実施され、質向上のための研修が盛んに行われている。しかし、それに社会的地位向上と待遇改善が連動しているかは疑問である。（最近給与の上昇の兆しが見られるが、それは人材不足によるところが大きい。）教員の待遇改善についてどのような制度設計を行ったのか、文化庁の文化審議会国語分科会日本語教育小委員会の議事録を使って批判的談話分析（CDA）の手法で検討した。委員会は2007年7月から2024年2月までに124回を数えた。本発表では「待遇」という語をキーワードとし、その初出である2014年からの教師の待遇に係る言説が時系列でどのように形成され、政策的に制度化されてきたかを明らかにした。 初期（2014～2016年）には、日本語教師の待遇は「ボランティア」の多様性や「シャドーワーク」の問題に関連づけて語られ、社会的地位や職業的魅力の低下として問題化された。中期（2017～2019年）には資格制度や研修制度の整備と待遇改善を連動させる議論が出てきたが、受益者である外国人の経済状況が改善を阻む構造的問題として浮上した。後期（2022～2023年）には、公認日本語教師の国家資格化に伴い、資格制度が待遇改善に寄与するという期待が高まる一方で、OECD 諸国との国際比較を通じて日本の待遇改善の遅れが再確認された。委員会のメンバーは待遇改善の必要性を強調するが、報告書などの公式文書に明記されず、文化庁側は具体的財政措置や政策化への明確なコミットメントを回避し続けているように見える。 このように、日本語教師の待遇に関する言説は、待遇改善の重要性が繰り返し指摘されながらも、行政の消極的な姿勢により具体的施策に至らず、待遇改善が制度的に阻まれる構造が示唆された。 キーワード：日本語教師、日本語教育、待遇、批判的談話分析、登録日本語教員			
13:30–14:00		C301	
【口頭発表】 留学プログラムにおけるカリキュラム改革の実践 ——言語学習を超えて社会参加を促進する		西俣美由紀（京都アメリカ大学コンソーシアム）	
言語を学ぶ者にとって、その言語が使われる環境に身を置く留学は大きな一歩だろう。発表者が勤務する留学プログラムは、30年以上に渡りその一歩を踏み出した学生をアメリカの大学から受け入れてきた。もともとは未来の日本研究者育成が主目的で、1～2学期の留学期間で日本語能力を伸ばしつつ、英語で歴史や文学、政治経済を学び、日本研究に必要な知識を身につけるプログラムとして発展した。しかし、日本研究よりも、アニメや漫画などへの興味から日本語を学び留学する学生が増え、教室外のコミュニティで共通の趣味を持つ他者と日本語でつながることを重視する傾向が強くなった。このような留学目的の変化に対応するため、発表者の留学プログラムはカリキュラム改革を行ってきた。本発表			

【口頭発表】
トランスランゲージングCLIL
——言語不安や意識は変化するか

戸出朋子（広島修道大学）

トランスランゲージング教育は、バイリンガル話者が言語の境に囚われず、自分の持つ多様な意味資源を駆使して間主観的に意味生成して学び合う教育で、モノリンガリズムからくる欠損イデオロギーからの脱却を主眼とする。一方、外国語教育では、目標言語のモノリンガルの母語話者の言語知識を規範とするので、トランスランゲージングと親和性が低く、学習者の「中間言語」はその規準から欠損した状態と捉えられる。特に英語の場合、新自由主義的な政策の下で教育が推し進められ、その帰結としての競争の激化により、欠損イデオロギーからくる言語不安が助長される。このことを鑑みると、英語学習者をバイリンガル話者と認めて、英語教育をトランスランゲージング教育に組み直すことを試みれば、より公平な教育を目指す上で意義深い。本研究では、言語教育を内容とする内容言語統合型学習（CLIL）でトランスランゲージングを促進する指導を行うことが、英語学習者の言語不安の緩和や言語意識の変容にどう貢献するかを研究する。地方私立大学の英語専攻の学生が履修する2025年度前期開講「言語教育法特講」の中で、バイリンガルのコミュニケーションやトランスランゲージングの言語学習・教育観などに関して、留学生も含めて学び合う授業を実施する。指導ではトランスランゲージングを奨励し、自己のコミュニケーションや学びについての省察と自己表現を促す。言語不安を測定するための質問紙D-LIS（Driver, 2023）への回答をコース開始時と終了時に収集する。さらに、自由意思によりインタビュー調査に同意する学生に対して、コース中間期に個別インタビューを行い、英語やその他の言語での交流や学びについての語りを収集し、欠損イデオロギーやトランスランゲージングイデオロギーという観点でテーマ分析する。発表では、コースの前後での言語不安の変化や言語意識の葛藤や変容を報告する。

キーワード：トランスランゲージング、CLIL、言語不安、言語意識、英語

【口頭発表】
「ことばを教える授業」再考
——母語話者、非母語話者が共に学ぶ授業を目指して

工藤節子（東海大学）

本発表では、日本と台湾のオンラインによる協働授業において、母語話者が非母語話者である学習者に「ことばを教える授業」について再考し、母語話者と非母語話者が「多文化共生」をテーマに、共に「ことば」を学び合えることを目指した過去2年間の授業実践について述べる。ここで言う「多文化共生」とは誰にとっても生きやすい社会にするために何が必要かを考えていくことである。この授業で、学べき目標が「日本語」なら台湾の学生は学ぶ側、日本の学生は教える側になるが、目標が「地球で起きているさまざまな問題を知ることとどう解決していくのかを考えること」であるなら、日本の大学生も台湾の大学生も学ぶ必要がある。そして、お互いにわかり合えることば（やさしい日本語、英語、接触場面で母語話者、非母語話者に限らず行う調節としてのコミュニケーション方略）を使い、授業デザインをして教え合うことで、地球市民としての意識に気づくような協働授業になると考えた。日台の学生たちが協働でデザインして実践した授業は、多言語政策、フードロス、ウェルビーイング、会社の取り組むSDGs、

LGBT、ユニバーサルデザイン、エイジハラスメント、外国人労働と多文化共生等があり、振り返りの考察から、開始時、日本語使用に困難を感じる学生がいたものの、グローバルな課題理解、異文化間の協働的対話による思考・視野の広がり、やさしい日本語の意義、コミュニケーション方略への気づきなどの学びが挙げられた。

この実践の成果として、母語話者が非母語話者に「ことばを教える」授業の前提を少しずらすことができ、この授業に参加した台湾の学生による「やさしい中国語」を使い、社会課題をテーマに母語話者、非母語話者が共に参加する新たな授業の試みも生まれたのが成果としてあげられるが、具体的に学生たちへの聞き取り調査と詳細な分析はまだ行われておらず、検証は今後の課題となる。

キーワード：ことばを教える、母語話者、非母語話者、多文化共生、コミュニケーション方略

【口頭発表】
型にはまらず、引き伸ばそう

新井潤（関西学院大学）

日本語学習者の多くが「日本人らしく」話したいと望むが、その具体的な要件は不明確である。スピーチコンテストや会話試験においては「流暢さ」が評価基準のひとつとなっているが、実際の日本語母語話者は必ずしも流暢に話しているわけではなく、言い直しやフィルターの使用が観察される。したがって、「流暢＝日本人らしい」とは限らない。

学習者が想定する「理想の日本語」を駆使する母語話者は、多様な話し方の「技」を持っている。その一例が「発音の滞留」である。これは、「本来なら何もないところで通常よりも長く発音をすること」と定義され、「とても」と「とっても」や、「すいすい」と「すーいすい」のように、促音や撥音、長音の挿入が見られる。ことばとして定着したものとして「やはり」と「やっぱり」、「あまり」と「あんまり」などもある。発音の滞留は、話し手が何らかの意図をもって使用する技であり、それによって発話がより日本人らしく聞こえると考えられる。

日本語学習者の発話に発音の滞留を加えた場合の印象変化について調査をおこなった。その結果、アクセントの型をおぼえ、繰り返し練習したスピーチよりも、発音の滞留を取り入れた音声のほうがより「日本人らしく」聞こえ、聞き手に良い印象を与えることがわかった。これは、学習者にとって重要な知識であり、日本語母語話者がどのように学習者の発話を受け取るかを理解することは、円滑なコミュニケーションに寄与すると考えられる。

発音の滞留は、自然習得されるものではなく、また特別に教育すべき高度な技術でもない。しかし、知識として持っていれば容易に取り入れることができる。日本語学習者がより日本人らしく話すためには、単にアクセントや流暢さを追求するのではなく、日本語母語話者の話し方の特徴を理解し、適切に取り入れることが有効であると主張する。非流暢な日本語を流暢に話すのが日本人らしい日本語なのかもしれない。

キーワード：発音の滞留、音声コミュニケーション、流暢、非流暢、日本人らしい

【口頭発表】
インターンシップを通して育む「批判的社会人」への道

長谷川敦志（ハワイ大学マノア校）

インターンシップは、高インパクト教育実践（High-Impact Educational Practice）として広く認識されている（Binder et al., 2015; Cheung et al., 2023; Tu, 2022）。大学生にとって、在学中のインターンシップは、将来のキャリアに直結しうる貴重な経験となるが、海外の日本語学習者が日本でインターンシップに従事する

【口頭発表】
内容重視の批判的言語教育（CCBI）のための言語教師教育方法論
——多角的観点からの批判的思考力を育てるために

佐藤剛裕（横浜デザイン学院）

実運用段階に入った登録日本語教員制度は認定日本語教育機関制度と結びついており、日本語教師をより交換可能な人材として扱う新自由主義的な方向性が鮮明になりつつある。この傾向は、日本語教育を狭義の言語形式や教授技術に特化した技能領域として見做されやすいものにし、教師の待遇や専門性の評価を一層不安定にする口実となるおそれがある。しかし、社会問題の不確実・複雑化が進む現在、批判的言語教育を担うには単なる言語項目の指導の枠を超え、人文社会科学全般にわたる幅広い学際的知性が不可欠である。実際、移民政策やジェンダー平等、技術革新に伴う格差などの社会・政治・文化的トピックを授業で扱う際、教師自身が多面的な視点をもたなければ学習者との深い対話は困難だ。ここでは、日本語教育学専攻であることが必ずしも最適とは限らず、むしろ社会学・政治学・文化人類学など学際領域の知を活かせるかどうかが鍵となる。

本発表では、ポスト質的研究の観点からアートベーストリサーチやオートエスノグラフィーを取り入れた新人教師教育の方法論を提案する。教師候補者自身の経験や社会文化的背景を省察するプロセスを軸に、言語教育をめぐる権力構造や価値観を批判的に問い直すことを目指す。これにより、新自由主義的な「交換可能性」一辺倒の風潮を乗り越え、学際的な知性と創造的な実践を兼ね備えた日本語教育者をいかに養成し、その共同体が集団的主体性を発揮できるかを具体的に検討したい。

キーワード：言語教師教育、ポスト質的研究、アンラーニング、アートベーストリサーチ、オートエスノグラフィー

【口頭発表】
学際的アプローチによるCCBI中級日本語カリキュラムデザインの試み
——多角的観点からの批判的思考力を育てるために

ロチャー・松井恭子（コロンビア大学）、ソーリアル・長坂直子（コロンビア大学）

現代社会は、気候変動、移民、ジェンダー格差、経済的不平等、戦争など、複雑で多層的な課題に直面している。こうした問題を批判的に捉え、より公正で持続可能な社会を目指す視点は、CCBIの中心的な理念である。Repko（2012）の学際的アプローチは、政治、歴史、文化、メディア、倫理など複数の知見を統合し、複雑な社会問題を新たに包括的に理解し、社会に応用する力を育成する枠組みを提供する。これを外国語教育に導入することで、言語は単なるコミュニケーションの道具ではなく、社会を読み解き、問い直し、他者と対話するための思考の手段として機能するようになる。学習者は言語を用いて社会問題を多角的に分析し、異なる価値観や視点を統合的に理解したうえで、自らの立場を形成し発信する力を養うことができる。これは、CCBIが目指す「世界とつながり、行動する市民」を育てるとい、グローバル市民教育の理念とも強く結びついている。本発表では、Repkoの理論に基づいてデザインされたCCBI中級日本語コースのカリキュラムデザインの試みを紹介する。

このカリキュラムは米国東海岸の私立大学において行われたカリキュラム改編の一部で、生教材を用いた10のテーマ別ユニットの一つである。2015年に発生した川崎市の中学1年生殺害事件を扱ったユニットで、事件の背後にある社会問題（経済格差、少年法、報道、ネット社会など）を多角的に考察した。学生は法律、ジャーナリズム、社会学などの観点から事件を分析し、現代日本社会や共通する世界の問題の本質を探った。さらに、興味を持ったテーマについてグループで調査を行い、解決策を考えてレポートにまとめた。口頭発表と意見交換の後に、クラス全体で包括的解決策を創出した。最後に、学習目標の到達度と学生によるカリキュラムの評価を精査し、本カリキュラムの有効性の考察も行う。

キーワード：カリキュラムデザイン、学際的アプローチ、多角的視点からの探求、社会問題、グローバル市民教育

案する。また、CCBIが提唱する、批判的思考の育成を、言語クラスと教科クラスにおいて、どのように連携し実現していくことができるのかという課題についても議論する。具体的には、今、開講を予定している現代文化資源学と日本語教育の総合学習を目指した短期サマー・プログラム「アニメとマンガで学ぶ日本語・日本文化夏季講座」のカリキュラムデザイン、活動計画、授業内容、教材開発、プログラム評価について、これまでの取り組みを報告し、新しいFLACの可能性を示す。

キーワード：CCBI、FLAC、批判的思考力の育成、マンガ、アニメ

14:00–14:30 C303

【口頭発表】
中級日本語授業における ungrading の試み
——多読授業の内省から

瀬瀬憲子（米国ノートルダム大学）

本発表では、米国大学で行った中級日本語授業における ungrading の試みを紹介する。

発表者は以前から教師主導型の成績づけに疑問を持っており、自己評価、ピア評価などの形で学習者を評価活動に巻き込む取り組みを行ってきた。そのような折、2014年に日本語多読授業を立ち上げた。教室内の個別読書を軸とする多読では、共通試験ができない。そのため、発表者は、出席や締切厳守を徹底し、提出物の内容や日本語力を評価しないことにした。すると、学習者の自律性や創造性が引き出され、教師の想定を超えた様々な成果が現れるようになった。

その1つが、多読継続履修者たちが自ら提案した中上級ディスカッションコースである。本コースは完全な学習者主導型として、彼らが目的や活動、評価方法を決め、シラバスを書き、コースデザインを行った。以来発表者は、一斉授業で従来教師が担ってきた様々なコントロールを、学習者に委ねたいと考えるようになった。

Blum (2020) は、成績づけの弊害を列挙し、それを極力避ける ungrading を提唱する。彼女の担当する文化人類学の授業では、ポートフォリオや自己評価、面談を重視している。そこで、発表者は、教科書を用いる中級日本語授業に、過去の多読授業の内省と共に ungrading の知見を取り入れた。授業では「何のために評価をするのか」について学習者が話し合い、テスト内容や評価方法を決めた。学習者の意見が評価に反映されることは、彼らの well-being にも貢献すると言える。学期中の頻繁な個人面談を通じて、教師は個々の学習者のニーズに対応するよう努めた。さらに、学期末には学習者と教師が成績について話し合い、合意形成によって最終成績を決定した。

日本語授業での評価は、とにかく言語面を重視した共通テストに片寄りがちである。発表では自己評価などの資料を分析し、学習者主導型評価のあり方を考える。

キーワード：評価、成績づけ、学習者主導、ungrading、多読

C204

9:00–10:30 C204

【討論会】
「日本語教育の参照枠」を通して語り合うラウンドテーブル
——哲学する教師を目指して

亀田美保（大阪YMCA日本語教育センター）、 奥村三菜子（NPO法人YYJ・ゆるくてやさしい日本語のなかまたち）
竹田悦子（コミュニケーション学院）、 山本弘子（カイ日本語スクール）

日本語教育の質の維持・向上を図るため、2024年4月より認定日本語教育機関および登録日本語教員の制度が導入された。そこでは2021年に文化庁が公開した「日本語教育の参照枠」（以下、「参照枠」）の活用が推奨されているが、これを規範的なツールと捉え、無批判に向き合おうと努める関係者も少なくない。そこで、本企画では、「参照枠」が参考としたCEFRとのズレから「参照枠」の特質を概観すると共に、新制度下において「参照枠」を活用する矛盾を指摘し、これを議論の俎上に載せた討論会を行う。新制度によって教育の枠組みと概念の変容が迫られるこの転換期は、いわば関係者一人ひとりが自らの態度とベリーフを自覚的に捉え直す好機でもある。言語教育の本質的な課題を共有し、双方向的な議論の場を設けることは、「未来を創ることばの教育」という本シンポジウムの趣旨にも資するものと考えらる。

12:00–13:30 C204

ポスター発表

15:00–17:00 C204

【ポスター発表&ディスカッション】
インクルージョンを推し進めると言語教育の本質が見える！

植村麻紀子（神田外語大学）、 池谷尚美（横浜市立大学）
中川正臣（城西国際大学）、 古屋憲章（帝京大学）、 山崎直樹（関西大学）

内容重視の批判的言語教育（CCBI）の根幹にある「批判的・クリティカルな視点」とは、「今ある社会をよりよくしていくという前向きな視点」と大会趣旨にあります。私たちの研究テーマは「インクルーシブな社会の実現に言語教育は何ができるのか」です。多数派の学習者を想定して設計された従来の言語教育においては、何かしらの困難に直面し、教員が意図しなくとも排除できてしまっていた学習者がいるのではないかと考えます。教育実践を批判的に捉えなおし、より良い言語学習環境を構築することに結び付けるには、本大会がふさわしい発表の場であると考えております。本企画では具体的ないくつかの事例と、個人レベル・学習空間レベル・社会レベルの3層に分けた問いを参加者に提示し、何者をも排除しないために、どのような学習環境設計が可能か参加者と議論し、言語教育において本質的に重要なことは何かを考える場を持ちたいと思います。

日本語教科書にみられる会話例の批判的考察

近藤さくら（関西大学大学院生）、飯利藍（関西大学大学院生）

本発表は、日本語の教科書を単なる教材としてではなく、イデオロギーの伝達装置として捉える批判的談話研究（熊谷,2008;野呂,2009）の視点から、その会話例を分析し、そこに潜在する言語的・社会的イデオロギーを明らかにする。

『みんなの日本語 初級Ⅰ』の会話例を分析した結果、教科書における会話の主導権は一貫して母語話者にあり、非母語話者は従属的な役割に描かれていることが明らかになった。このような描写は、「母語話者＝正統／標準」「非母語話者＝逸脱」という構図（太平,2009）を再生産しており、異なる言語的背景をもつ学習者の主体的な言語使用の機会を奪う可能性がある。また、会話例では非母語話者が受動的に誘いを受け入れる描写が多く、交渉力や関係構築の主体としての描写が希薄であることが分かった。この点は、文化間の相互理解に不可欠な「共有可能な認識へ至る交渉力」（嶋津,2016）を形骸化する懸念もはらんでいる。さらに、教科書には非母語話者同士の会話がほとんど描かれていない点から、日本語を母語話者のみに帰属する（義永,2021）とみなす視点も認められた。義永（2021）が指摘するように、言語教育における母語話者主義（native-speakerism）は、標準語や「正しい」言語使用の名のもとに不平等な力関係を再構築し、教育実践の中に不可視化されたイデオロギーを内包している。このようなイデオロギーは、教育現場の中立性という幻想を支えつつ、学習者の多様な言語的・文化的資源を周縁化する恐れがある。

これらの問題の解決のためには、Kubota（2008）のいう「支配と従属の構造に気づき、変革を提起する教育実践」こそが、異なる背景を持つ学習者が対等に交流できる日本語教育を展望する鍵となる。今後は、学習者とともに教科書の言説を読み解き、批判的視点から対話を構築する教育実践が必要になると考える。

キーワード：母語話者主義、言語イデオロギー、教科書、クリティカルな視点、関係構築

語られる自己はいかにして生まれるか

——大学教員の人生の径路に着目して

尹恵彦（大阪経済法科大学）、西村英希（近畿大学）

本発表では、個人の人生径路を対象として、ことばに関わる教育者や研究者を選択するに至る過程を可視化し、その過程で影響を与えた社会的諸力のありようを検討する。

現代社会においては、多様性や個を尊重する価値観が広がる中で、自己表現の重要性が改めて強調されている。しかしながら、自己を語るに至るまでの過程は十分に捉えられておらず、自己表現の背後にある個々人の複雑な意味づけのプロセスは、なお可視化されにくいままである。

そこで、自己を語るに至るまでの内的変化と社会的諸力との関係性を明らかにする手法として、オート複線径路等至性モデリング（以下、オートTEM）を用い、自己を語るという行為がいかなる過程を経て、どのように意味づけられていくかを図的に可視化することを試みる。

自己を語る行為に至るまでの径路を可視化することにより、当該行為が、自己を取り巻く社会的諸力、径路の選択および偶然・必然性といった複数の要因との対話的關係のなかで構築されることを明らかにする。このような試みは、教育や言語研究の領域における「語る主体」に対する理解を深化させ、多様な学習者や教育実践者の自己表現を促す媒介として機能する基盤を提供する点において意義がある。

本研究では、ことばに関わる教育・研究に携わる二人の教員の経験に着目し、各自のオートTEMを作成したうえで、ハーマンスらによる『対話的自己論』を理論的枠組みとして分析・考察を行った。その結果、オートTEM図は教員自身による自己表現を促す媒介となり、様々な社会的諸力が「内なる自己」との対話の中で意味づけられていることが明らかとなった。さらに、異なる側面をもつ自己同士が応答し合う多声的な対話の過程を通じて、過去の経験が新たに意味づけられ、再構築される契機となっ

日本語学習者の授業時の内言の調査

——質問紙の試作と実施結果の分析

加藤伸彦（京都外国語大学）

本発表は、中級レベルの日本語学習者の授業時の内言の2か月間の変化を、発表者が試作した質問紙を用いた調査により、比較した結果を報告するものである。

内言は、社会文化理論（sociocultural theory）においては、思考・学習・感情を媒介する道具であり、その使用頻度や使用目的に関して多くの研究が行われてきた。内言の調査法として代表的な手法の1つが質問紙を使用した調査であり、今まで、バイリンガルの認知や感情を対象とするBilingualism and Emotions Questionnaireや第二言語学習者のメンタルリハーサルを対象とするQuestionnaire on Inner Speech and Mental Rehearsal of the Second Languageなどが開発されている。

日本語教育に関しては、学習者の授業中の内言の使用頻度や使用目的を対象とした質問紙は開発されてはいない。日本語学習者の授業中の内言の使用について、傾向を把握することができれば、社会文化理論に依拠する日本語教育研究者と学習者への教育実践に携わる日本語教師の双方にとり有益だと考える。そこで、本発表では、日本語授業時の内言調査のための質問紙の試作の過程と、学習者8名に対し、2024年10月と12月の2回、Google Formsでデータを収集した結果を報告する。質問紙は27の質問と、日本語を内言として使用することがあるかという使用頻度を「1.全くない」から「7.いつもある」までの7段階で問う回答からなる。質問項目は、例えば、「1.私は、日本語の授業中、短いフレーズや単語の長さの日本語で考えることがある」といった日本語の授業で使用する内言に関するものである。

結果だが、まずクロンバック α 係数は1回目が.844、2回目が.818であり、質問項目の内の一貫性は高いといえる。次に、学習者の内言の使用頻度であるが、分析に、Wilcoxonの符号順位検定を用い、有意水準5%未満で1回目と2回目の各学習者の平均を比較した。その結果、1回目と2回目では、平均が有意に上昇しており（ $p<0.05$ ）、2か月間で学習者の授業時の内言の使用頻度が上昇したことが示唆された。

キーワード：内言、社会文化理論、質問紙、日本語学習者、日本語授業

国際共修授業における「人生の木」を通じたナラティヴの実践

——内容重視の日本語教育への応用に向けて

近藤弘（北海道大学）

本発表では、国際共修授業「ライフストーリーを聞く・語る」で実践した「人生の木」によるナラティヴ実践について説明し、その意義と課題について留学生のレポートを通して考察する。そして、本実践の日本語教育への応用可能性を探る。

人生の木はナラティヴセラピーの一種である（ナラティヴ実践協働研究センター、2020）。参加者は自身の人生を一本の木に例え、ルーツ、経験・出会い、現在の価値観などを記述し、他者と人生の木について語る・聞く活動を行う。参加者の価値観とその形成過程を、社会・文化的背景を捨象せずに記述し、語る・聞く「人生の木」の実践は、国際共修授業の目標である異文化理解能力の育成に貢献すると考えられる。

発表者は2024年度後期の国際共修授業で人生の木の実践を行った。参加者は留学生10名、日本人大学生11名の計21名である。実践は3回（1回90分）に分けて行われた。1回目は人生の木の目的と方法について説明し、参加者は人生の木を記述した。2、3回目は質疑応答も含め1人30～40分程度、自身の人生の木について語った。

留学生のレポートでは「周囲の人々の影響が私の人生にどれほど大きな役割を果たしてきたのかを再確認することができた」「お互いの存在を理解してみた。（中略）一緒に皆の共通点を探し、仲良くなる

ことができた」「ここまでたどりついたオレ偉い!」という気持ちになり、自己肯定感が高まった」などのコメントが確認できた。本実践は、留学生の自己・他者理解及びエンパワーマメントに繋がるだろう。また、日本語教育としての人生の木の活動は、書く、話す、聞く要素を含む総合的なB1レベルの活動となり、学習者のエンパワーマメントを促す内容重視の日本語教育実践となる可能性があるだろう。

ポスター発表では本実践について詳しく論じ、聴衆との意見交換を通して、日本語教育への応用可能性を探っていきたい。

キーワード：語り、ライフストーリー、エンパワーマメント、自己理解、他者理解

「日本語」 関連政策談話の批判的談話研究

——政権与党と野党第一党の政策文書を比較して

加藤林太郎（神田外語大学）、 山元一晃（金城学院大学）

近年日本語教育に関する法律が相次いで成立したことは、日本において日本語教育が言語教育政策の一部として明確に位置づけられたことを示している。それがどのような政治的な力学の下で成立し、運用されようとしているのかについて知ることは、日本語教育を社会に有機的に位置づけることに繋がる。また、それがどのような体制の下で実行されるのかを見ることで、日本語教育関係者の社会における立ち位置や役割を特徴づけることにも寄与する。このような視座から、本研究ではフェアクラフ(2012)の批判的談話研究から「社会的行為者」の概念を援用し、政権与党である自由民主党と第一野党である立憲民主党双方の政策に現れる「日本語」という語を含む文における言語的实践を分析する。いずれの政策においても作用的行為者は政党自身であるが、述部に現れた行為について観察すると、自由民主党では「配置・活用・実施・充実」などの既存の社会的枠組みを維持するための行為としての施策が見られる一方、立憲民主党では「求める・創設・育てる・図る」のように社会的枠組みの改変や他者への関与が前景化されていた。また、文中に包括されている被作用的行為者を抽出すると、例えば「子ども」について自由民主党が「公立学校における外国人の子供、日本語指導が必要な子供」と限定的な例示を行っているのに対し、立憲民主党は「外国にルーツを持つ全ての子ども、一人ひとりの子ども」と包括的な記述を行っていることが分かった。これらの分析から、政権与党としての姿勢と野党第一党としての姿勢は日本語関連施策にも反映されており、政治の動向が日本語教育に影響を及ぼす構造の一端が可視化された。また、政策に包括された社会的行為者は、隠蔽・背景化された者と合わせ、日本の言語政策におけるステークホルダーとして位置づけることができよう。

キーワード：批判的談話研究、言語政策、政策、社会的行為者

まちのことはを考えつくる実践をともにふりかえる

——未来をつくることばの活動の展望

佐野香織（武蔵野大学）

本発表は、「共により良い社会を考え、つくる」を切り口に、どのようにその社会（まち）のことは考えつくっていくのか、これまで発表者が企画・実践・参加に関わった日本の地方地域における広義のことばの活動をとらえ直し、そのあり方を展望するものである。本発表では、発表者のこれまでの実践と報告を元に、その後の跡付けを批判的に行う。

発表者は、社会をつくり、未来をつくることに軸を持ち、まちや教育現場、地域日本語教育の文脈でことばの活動の省察的实践（柳沢、2011、ショーン、2017）を行ってきた。そして、まちの人々と「より良いまち、社会とはどのようなものか」「まちのことはとはどのようなものか」を考え、実践する試みをしてきた。

本発表では、日本で日本語教育推進に関する法整備がすすめられていた2018年前後から2024年までの実践の跡付けを行う。具体的には、次の1)～3)の問い直しから始まった実践を取り挙げる。1)日本語教育に関する法整備前における、国、都道府県の地域日本語教育整備体制というトップダウン的なものと、市民レベルによるボトムアップ的な動きの2極化の暗黙の前提の問い直し、2)1)の2極前提

から、問題解決に向けて個から国家レベルまでの多層性、多場性各間をつないで考えていく問いなおし、3)ローカル・ガバナンスの観点で日常を生きる経験から「今よりちょっといいまち」、「まちのことば」を考える実践の問いなおし。これらの考え、ことばの活動実践を批判的にふりかえる。その上で、現在の状況を踏まえ、今後の展望について参加者の皆さんと対話をしたい。

キーワード：まちのことば、省察的实践、跡付け、ことばの活動、地方地域

自分が生きる未来やコミュニティを創造するために

——日本語学校における実践と課題

寺浦久仁香（武蔵野美術大学）

本発表は、A日本語学校の上級で学校指定の教科書を使用しながら、内容重視の批判的言語教育(CCBI)を目指した活動の実践と、実践から浮かび上がる課題について報告することを目的とする。

A日本語学校の上級では『上級日本語教材 留学生のための分野別学びの扉』(以下、『扉』)を使用している。『扉』は「活動を通して、他者とのかわりの中で自分自身を見つめなおし、自律的に成長できる人材育成を目指している」ことを目標としている。本活動は、「クリティカルな意識・視点・姿勢・態度の育成を学習目標」とすることを目指し活動デザインを行った。また、留学生の目標は、CEFR-CVの「仲介活動」の「(例示的)能力記述文(Can-do)」から目標を定めた。

本発表では、第3章「農・林業学の扉」の「農業人として生きる」での活動を対象とする。活動の進め方は①農業に関するイメージと知識の共有②『扉』の語彙や文法の補完を行いながら学習③次世代農業に関する生教材をビアリーディングとジグソー法を応用した手法で学習し理解を深める④学習内容の理解共有と「農業の未来」に関する意見を議論し意見文を書く。③に関しては、手順と仲介活動の目標を意識化できるワークシートを作成した。

分析したデータは、教師による活動内観察、留学生が活動の振り返りとして書いた「農業の未来」に関する意見文、授業の進め方に関する感想である。その結果、意見文では自分につながる問題であるという意識が芽生え、今後の「農業」の課題に目を向けることができた。しかし、「自分が生きる未来やコミュニティを創造する」点に関するクリティカルで主体的な議論は十分にできなかった。留学生の中には、自分自身が「自分が生きる未来やコミュニティを創造する」ことの主体である自覚を持たない学生も多い。今後の課題は、学校全体の教師が協働で、クリティカルな意識・視点・姿勢・態度の育成に取り組む必要があるという点である。本発表を通し、参加者の皆さんと課題に対する意見交換をし、深めていきたい。

キーワード：内容重視、クリティカル、主体的、仲介、協働

日本語教師にとって「成長」とは何を意味するのか

——「自己語り」と「語り合い」からの考察

山本もと子（信州大学）、 嶋津百代（関西大学）

1990年代後半以降、日本語教師の養成や研修は「教師トレーニング」から「教師の成長」へとパラダイム転換されたことにより、教師自身が自らの授業を内省したり、他者との協働を通して新たな気づきを得たりする様々な活動が提唱されてきた(横溝,2000; 館岡,2016)。そして現在に至るまで、「教師の成長」は、教育現場において周知のことばとして広く認知され、使用されている。しかし、「教師の成長」が何を指しているかによって、「成長」を促す活動のデザインもその目的も異なってくる。

本研究では、「教師の成長」を、個人のライフステージに応じたキャリアの意味や解釈の変容(サビカス,2015)として捉え、「私はなぜ教師であり続けるのか」「私はなんのために教えているのか」を自らに問い続けることを、その中心に置く。そして本発表では、2人の現職日本語教師を例に、「日本語教師にとって『成長』とは何を意味するのか」を考察する。本研究は、当事者自身が探究対象となる「自己語り」(松嶋・保坂,2024)を採用した。さらに、発表者らは各自の「自己語り」を読み合った上で、「語り合い法」(大倉,2002)によって「教師の成長」に対する理解を擦り合わせていった。

2人の「語り合い」から明らかになったのは、1) 年齢や社会的地位・役割にかかわらず、学び続ける態度そのものを「成長」であると捉えていること、2) 学びによる自己や他者の変容を怖れない（否定しない）ことを受容していること、などである。これらの点とともに、発表では、「教師の成長」は、日本語教師に求められる資質・能力（文化審議会国語分科会, 2019）としての「知識」や「技能」の向上にとどまらず、教師の「態度」そのものを批判的に再構築していく過程であることも示す。本発表での考察が、「教師の成長」の捉え方の1つとして、教師養成や教師研修における「態度」の育成の可能性に示唆するところも議論したい。

キーワード：教師の成長、自己語り、語り合い法、日本語教師養成、教師研修

日本語教科書の定義・特徴・分析の観点からの文献検討

——教材研究から教材分析、そして批判的教科書研究へ

吉井雄樹（関西学院大学大学院生）

本発表は批判的な態度を伴った日本語教科書研究に方向転換を促すことを目的とする。そのために日本語教科書の定義および特徴、分析の観点から先行研究を整理する。これまでの日本語教科書関連研究では、批判的分析は限定的であり、少なくとも主流の研究課題であったとは言い難い。しかし、教科書とは一見すると「中立で」「正しい」知識を提供しているように見えるが、徹底的に政治的なテキストだと言われる。このような教科書の批判的分析の意義にもかかわらず、批判的分析が限定的である現状には課題が残されていると考える。そこで、本発表では日本語教科書の定義と特徴、分析の観点から先行研究を整理したうえで、方向転換の1つの可能性として批判的談話研究の観点を紹介する。まず、批判的分析する対象を同定する必要がある。日本語教科書の定義では、教科書が特定の教育／学習の目的上のカリキュラム・デザインに従い、学習項目／シラバスが組織的にまとめられ、配列されたものだということがわかる。次に、教育／学習目的に合わせて記述内容が選択された日本語教科書の特徴を先行研究から検討した。その結果、日本語教科書の内容の配列には絶対的な基準と教科書検定がないことから、著者の主観や作成時の教育/学習観が反映されたものであることを確認した。最後に、日本語教科書の分析の観点から先行研究を整理した。教材研究と教材分析は、検討対象が教材であるところに共通するが、教材研究では「いかに効率的に」が問いになるのに対して、教材分析では「今使っている教材が適切であるか」が問いになるところに異なりがみられる。また、教材分析と批判的分析では教材の前提を問うという点では重なりがあるが、教材分析がその分析によって過不足を補うために行われるのに対して、批判的分析では教科書を言説として捉え、隠れた作成者の意図や信念を可視化するために行われるという点で異なると言える。本発表では、具体的な観点として批判的談話研究を紹介し、今後の日本語教科書研究に貢献できる点を4つにまとめて提示する。

キーワード：日本語教材、教科書論、批判的談話研究

「日本語教育の参照枠」に基づく「生活Can do」を用いた「生活」に関する日本語教育プログラムの開発実践とその課題

——トップダウンとボトムアップの協同を実現するには

内山夕輝（公益財団法人浜松国際交流協会）、鈴木由美恵（公益財団法人浜松国際交流協会）

河口美緒（公益財団法人浜松国際交流協会）

本研究では、令和5年度文化庁地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業の取組の一つである『「日本語教育の参照枠」に基づく「生活Can do」を用いた「生活」に関する日本語教育プログラムの開発』（以下、「生活日本語教育プログラム開発事業」）を研究の段階や方法で区別したマトリックスのうち「戦略研究」にあたとし仮定し研究的位置付けを試みる。そして、開発の過程において顕在化した諸課題を分析し、本事業の政策的意義を批判的に考察することを目的とする。その上で今後の継続的な発展のために、生活日本語教育プログラム開発事業の展望を共有したい。

開発の過程からは主な課題として、適切な人材の確保や、プログラム構築に資する先行事例の収集が困難である点が明らかとなった。また、プログラムの実効性を担保し、継続的・発展的な改善を促進す

るには、実施団体による内省的評価のみならず、行政当局または第三者機関による評価システムの導入が必要であることが示唆された。

生活日本語教育プログラム開発事業は、その成り立ちや意義、主体をみる限り、戦略研究の定義に十分ななっているといえる。しかし、現状はトップダウンで地方公共団体の役割とされているからか、事業実施の地方公共団体数は多くなく、日本語学習機会の地域間格差もうみかねない。

国の政策として地域日本語教育の体制づくりを進めるのであれば、国が司令塔となり時間・人材・予算をかけたシステムの元で生活日本語教育プログラムが開発されることが望ましいと考える。また、そうして開発されたプログラムを地方公共団体が地域の実状にあわせてカスタマイズすることができれば、まさに戦略研究がいうところの政府が設定する目標や分野に基づいた立案者と実行者の協同となる。

本国際シンポジウムで、開発の成果物ではなく過程と課題を共有することで、共生社会実現のための日本語教育政策をボトムアップで再構築する機運を高めたい。

キーワード：戦略研究、生活日本語教育プログラム開発、コース・デザイン、トップダウン、評価システム

脱植民地化のための言語教育

——ブラジルにおける日本語教師育成の現場から考える

Bueno da Silva Junior Antonio Marcos（早稲田大学大学院生）

本研究の目的は言語教育に関する諸研究を整理することで、脱植民地化と言語教育との関係を明確にすることである。その上で、ブラジルにおける日本語教師へのインタビューを通して、教育実践における困難や植民地性がどのように表出されるのかを明らかにする。

その結果、先行研究により、ブラジルの日本語学習者が抱くブラジルと日本の文化的関係に対する認識には、植民地性の影響が明らかになった。そこで、学習者が二項対立的な意見を通じて、自文化より、他文化のほうが優れた傾向が見られ、偏見や差別的な態度も見られた。このような視点から、いまだに不平等かつ階層的な構築が維持されているというシステム的な関係性を理解することもできた。そのため、より公正な社会構築に向けて、脱植民地化の思考は、権力関係の構築過程を再考するための視座を提供し、言語教育を通じて新たな教育デザインや、より公正な社会構築に向けられる可能性があると考えた。

本研究では、まず広く脱植民地化に関する先行研究を検討し、ブラジルにおける日本語教師への半構造化インタビューを実施した。近年、言語教育に関する批判的なアプローチを目指す研究が多く行われている中、脱植民地化の視点を通じて、新たな教育実践をデザインする研究が進められている（Dellollio & Martinez, 2019; Kabongo, 2023; Martinez, Figueiredo, Milan, 2023; Menezes de Souza, 2023）。そのため、本研究は日本語教育を新たな視点から捉えることで、教育現場における実践や教師育成への貢献が期待される。今後の課題としてはこれらの分析を踏まえ、より批判的な視点に立った教師育成の可能性を探る必要がある。

キーワード：脱植民地化、言語教育、日本語教育、教師育成